

言語・文学分野をめぐる断想——中国古典学の立場から——

2011/05/20 川合康三

「言語・文学」が過去の中国の社会や文化のなかでどのような意味をもったかを見るのが、「参照基準」作成において果たして役に立ちうるか。しかし自分の立場からはそれのほかに語れることもないし、その評価はともかくとして、異常なほどに長く一貫した「文」の伝統をもった中国のありさまを一瞥しておくことも、多少の意味をもちうるかもしれない。

旧中国においては、まさしく「言語・文学」に絶対的な価値を置き、その能力をもつ人々（士大夫）が文化の、そして社会の支配者として君臨し続けたのだった。「文」に対して「武」は常に下位のものとみなされたし、「学」（人文的学問）に対して「術」（医学・薬学・工学など実用的学問）は終始して劣位に置かれた（そのことが自然科学の遅れをもたらしたとされる）。

「孔門の四科」と言われるものがある。四つの分野に分けて、孔子の門弟のなかでそれぞれに秀でる弟子を四科併せて十人（孔門の十哲）並べた『論語』先進篇の一条に基づくが、四科はその後も士大夫が身に付けるべき科目として受け継がれた。その四科とは「德行・言語・政事・文学」。四科のなかに「言語」も「文学」も登場している！ただし、ここでいう「言語」は外交使節として必要な言語運用能力を指すと解釈されている。また「文学」は狭義の文学ではなく、広く文献に基づいた古典的教養を指す（今の日本語・中国語で言うところの「文学」は明治八年の『文部省報告』のなかで *literature* の訳語として用いられたのに始まる。西欧においても *literature* の狭義の概念は十八世紀末に発生し、十九世紀を通して定着したものであると言われる）。孔門四科のうちの「德行」と「文学」が個人の内部で完結する、対自的なものであるのに対して、「言語」と「政事」は社会活動における、対他的な能力を指す。また四科の順番はそのまま四科の価値付け、重要度も示している。

「言語」が外交的辞令、政治の場で応対する会話能力をもつばら指していること、すなわち話す技術や能力が重んじられたのは、おそらく先秦以前に限られ、それ以後は書く能力が偏重されて、話し方に対する関心は薄いかに見える。西洋と異なり、弁論術は中国では発達しなかったのである。案ずるにそれは中国の広さと関係がある。統一された時代の中国はヨーロッパ全体を含むほど広大であって、各地の方言は外国語ほどに隔たりがある。中央集権国家において、中央の朝廷から各地に派遣される官僚は、朝廷の命を伝達するためには「書き言葉」に頼るほかなかった。「書き言葉」が一種の標準語、公用語として機

能したのである。しかし庶民の識字率ははなはだ低い。そして「官」は原則として出身地に赴任することはないから、赴任地の言葉はしゃべれない。そこで朝廷に所属する「官」と各地の「庶」（庶民）との中間に位置して、中央と地方の媒介役を果たす「吏」の存在が必要であった。「吏」は現地雇用の役人であり、地方の言葉をしゃべれるとともに、ある程度の読み書きができた。「官吏」は本来、「官」と「吏」という二重の官僚体制に由来するものであり、「官」と「吏」とは決定的な身分の差があった。

中国全土に通用する「書き言葉」とは、古典を基準とした「文言」（文語）であり、それこそ「公共的言語」というべきものであった。「官」は公共的言語を運用できることによって「官」たりえたのであり、支配階級たりえたのだった。

文語を駆使しうる支配階級は、もとより出自によって固定されていたが、唐代半ば以降になると下層の士大夫層が進出する。その契機になったのが、いわゆる科挙の試験であった。権力を握った為政者が、既存の階層勢力に対抗するために、科挙を設けて新たな階層を己れの勢力下に取り込もうとしたというのが、科挙を始める動機だったことだろう。宋代以降になると、科挙に通らずして官に就くことはほとんど不可能となるほどに、官僚採用の基本的条件として定着し、それが清末まで固定したまま続く（そのために「アジア的停滞」がもたらされたとも言われる）。科挙とはまさしく「言語・文学」の能力試験、公共的言語を運用できるか否かの試験であった。

この体制は、科挙制度が消滅したあとも、実は中華人民共和国になっても、そのまま続いたかとさえ思われる。中国の大学では「中文系」（中国文学学部）が文系で最大の規模と権威を備えていた。中文系卒業者が国家の高級幹部になったのである。30年ほど前までは確かにそうであったが、その後、開放経済の進展、それによる政治・経済の国際化という変化のために、文系でも法学部、経済学部が擡頭著しく、現在では中文系にかつての輝きはない。二千年以上続いた「文」の支配が今、終わろうとしている。

中国のこのようなありさまに鑑みると、今日の世界で「言語・文学」はもはや無用のものとなったのだろうか。社会の機能を発揮するためには、法学・経済学などだけで事足りるのだろうか。しかし、社会が成熟するにつれて、直接の効率だけではすまされない、深み、厚みを人は求めるのではないだろうか。そこに人間の文化というものの存在意義がある。過去の中国における問題は、「公共的言語」が一部の階層の人々に独占されたことである。公共的言語を運用できることが特権階級を保証したのだ。識字率がおそらく日本などより遥かに低かったのは、そのことと関わりがある。ならば、今日、そして将来、求む

べきは、かつて一部の人々に握られていた「公共的言語」を、広く人々すべてのものに広げ、高めることだろう。教育の任務もまさにそこにある。

\*

ある漢字学者によれば、「今日ほど日本人が文を書く時代は、かつてなかった」とのことである。活字離れが嘆かれている時代に投げられたこの発言は、一見すると意表を突くものであるが、携帯メールとかブログ、ツイッターなどを指して言ったものと知れば、なるほどと納得する。しかし電子媒体に書き込む文は、はたして文といえるものか。幼稚な言葉の垂れ流しに過ぎないのではないか。それが盛んに行われ、通行していることは、かえって「ちゃんとした文章」の衰退を招いている。「ちゃんとした文章」を書ける能力を養い育てることは、教育が担わなければならない。

\*

「ちゃんとした文章」とはどんなものなのだろうか。最小限必要なのは、何を言いたいかを的確に伝わること。しかし内容をきちんと伝達しうる言語を書くことも実は容易ではない。そのためにも、ある程度の習練が必要である。「作文」というと初等教育のなかでしか行われていないが、高等教育にもあってよいのではないか。

伝達機能だけで終わらない、「味わうに堪える文章」を書くには、読書、ことに古典の読書が求められる。というより、読書とは古典を読むことにほかならない。「言語・文学」の教育は古典の読書と切り離すことができない。

古典はなぜ必要か。それに答えることははなはだむずかしい。というのは、古典が全きかたちで活かされたモデルが、過去の時代のなかに見付けにくいからである。古典復興を唱える論者は往々にして過去の賛美に終始するが、その際、過去の醜悪な面には無頓着である。古典の習得が特権階級のしるしであったり、あるいは単に知識・教養をひけらかすためのものであったりしてはならないことは、いうまでもない。

我々個人の感情・思考が過去の文化を継承しながら形成されたものであることを知れば、現代の世界に面しても過去の文化は切り離すことができない。古典と現代をいかに結ぶかが要となる。先に挙げた「孔門の四科」を思い起こしてみよう。そこでは対自的な能力と対他的な能力とが二つずつ挙げられていた。四者は別個に分化されているのではなく、本来一人の人間のなかで兼ね備えるべきものとされた。ということは、人格の修養とか政治的営為とかと、古典的素養とが結びついていることが理想とされていたことがわかる。どのように理想に近づくかが問題であるが、古典が今の世に活かされるべきものとして捉え

られていたことは確かだ。

教科書的に言えば、古典の読書を積むことによって、言葉は単なる伝達の道具であることを超え、人間存在の全体を懐抱する深みと豊かさを備えるものとなり、また書く人にとっても自己の人間を知性の面のみならず、感性、情動の面でも高めるものとなりうる、ということになるだろうか。

\*

上に記した「ちゃんとした文章」とは、言うまでもなく、母語のそれに限られる。外国語の学習は、一つは孤立しえない今日の世界にあってコミュニケーションの能力を備えるという実用的な用途、二つは自国の文化・言語を相対化して見る視点の獲得、そうした点から必要なものではあるが、母語をしっかりと学ぶことはそれとはまったく位相の異なるものだ。すべての学びの基本となる主体の形成、確立に必須のものだからである。

\*

「言語・文学」の「文学」を狭義に捉えるか、広義に捉えるか？狭義の文学が文化のなかで後退しつつあると言われる今日、文学はおのずと広義のそれに傾く。確かに近代の日本では狭義の文学が偏重されすぎたきらいがあるかに見える。論理的な思考が日本語・日本人には乏しく、情緒に流されやすいという指摘は、本当にそうなのかどうか検証されることもないまま、手垢がつくほどに聞かされている。そこには感情を論理よりも低いものとみなす態度がある。しかし人間が感情をもつ動物である限り、感情も論理と同じく人間を人間たらしめるうえで欠くべからざるものではないか。豊かで暖かい、人間味溢れた感情——それを情操と呼ぼうか——情操をはぐくむことは、人間を形成したり、文化を豊かにするために大切なことではないか。そして情操に深く関わるのは狭義の文学であって、その意味で狭義の文学も衰退するにまかせてはおけない。